
化物語～日々物語～

月千一夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

化物語〜日々物語〜

【Nコード】

N1457Y

【作者名】

月千一夜

【あらすじ】

過ぎ去った日々は、懐かしく・・・どこか、愛おしい。
そんな風に思えるなんて、僕も随分と大人になったということだろうか？

まあ、いいさ。

それらは全て、もう終わった物語。

ならば・・・今さら語るのも、無粋というものだろう？

――――

本作は“化物語”“偽物語”の後日談的なポジションです。
といっても、作者の拙い文章力では原作のイメージをぶち壊してしまいかもしれませんが。

それでも良いという方は、どうかご覧になってやってください。

また、本作は“お前って、恋姫以外はなんかかけないの？”と言われた為試験的に書いたものの為。

更新速度は、あまり期待しないでください。

ひとまず、？？？話くらいまでは早めに載せますが。

あらずじとしては、後日談な為。

のんびり、まったり、時々ビックリを主に進めていきます。

それでは、どうかお楽しみください

日々物語ゝ前語りゝ（前書き）

さて、まずは前語り

何の変哲も、面白味もない

本当に、平平凡凡な前語りです

日々物語〜前語り〜

――春休み

僕は・・・アラビキトミ“阿良々木暦”は、吸血鬼に襲われた
美しい鬼だった

とても・・・美しい、鬼だった

それから色々あったが、今では元通り・・・“ではなく”

僕は・・・“人間には戻れたが、ある種の後遺症を負ってしまった”
日光や忍辱、十字架は平気なのだが

身体能力は、著しく上昇したままなのだ

といってもそれは運動能力ではなく、新陳代謝など所謂“回復力”
の方なのだが

しかし、それだけをとっても、僕はもう唯の“一般人”とは呼び難
い存在なのだろう

これが・・・僕が、一番最初に出会った――“怪異”

それからは、めくるめく“非日常の連続”

“猫”

“蟹”

“蝸牛”

“猿”

“蛇”

“蜂”

“不死鳥”

“怪異は、怪異を呼ぶ”などと、言っていたが
それにしただって、これは流石に多すぎやしないか？

——等と思いもしたが、僕から関わっていった怪異も多く
やはり、自業自得でもあるのだろう

それよりも、だ

それほどの凄まじい体験をしておきながら、それらを全て“懐かし
く”

しかも“思い出”として語れるようになったことを
素直に、喜ぶべきなのだろうか？

まあ、いい

それはもう、いいさ

それらはもう、全て過ぎ去った日々のこと
過去のお話

今よりも少し前・・・終わってしまった、“物語”
ならば、今さら一々語らうのも無粋というものだ

それよりも、僕が語るべきは他にあるのだろう

例えば、“今”のこと

あの非日常が過ぎ去った後の、今の“僕たち”のこと

“相変わらず騒がしく、姦しい・・・僕らの、物語を”

化物語～日々物語～

――――

「はぁ・・・」

と、溜め息を一つ

それから見つめた窓の向こう

太陽は、もうとつくに“お休みなさい”と地平線という名のベッドに沈んでいた

そんな太陽を少し恨めしく思いつつ、そんな太陽と入れ替わり仕事中な月に少しだけ心癒された

――いや、“嘘”だ

癒されてなんかいない、これっぽっちも

「そもそも、勉強の疲れがそう簡単に癒されるかって話だよ」

等と、言ってみる

たかが勉強

“されど”勉強

元々集中力のない僕からしたら、こんな時間まで頑張れたのが奇跡みたいなものなのだ

「あら、阿良々木君・・・もう、くたびれたのかしら？」

相変わらずだらしないわね

ゴキブリの方が、まだ頑張り屋さんよ」

ふと、そんな僕に、容赦のない声が聞こえてくる

其の声の主は、僕の向いに座り

そこで、僕を見ることなく

淡々と、文字を書きつづけながら言ったのだ

“戦場ヶ原ひたぎ”

僕のクラスメイトにして、僕の――彼女

以前に“蟹”に憑りつかれ、“重さ”を失くした経験を持つ少女

“怪異に出会ったことのある少女”

そんな彼女なのだが、今ではもう普通の少女だ

いや・・・普通とは、少し言い難いかもしれないが

そもそも、だ

「ねえ、ガハラさん？

貴女・・・あの一件以来”、“ツンデレ”を卒業したんじゃないか
ったんですか？」

“あの一件”、というのはまあ

彼女の過去に深く関係し、彼女の“未来”に関係していた
色々あった、過去の物語

先ほども言ったが、過去の物語を今さら語るのも、無粋というものだ
メタなこと言えば、詳しくは“偽物語”という

やはり、過去の物語を読んでもらうほかはないだろう

――と、話題は戻るが

その一件以前の戦場ヶ原は、それはもう凄まじい“ツンデレ”だった
ある時は、ゴミ呼ばわり

ある時は、シャーペンを目に刺されそうになり

ある時は・・・と、あげればキリがないだろうことを、それはもう
良い笑顔でやってのけたものだ

しかし、そんな彼女だったのだが

その一件以来、すっかりと丸くなったというか

いや・・・“元に戻った”というほうが、正確なのかもしれない

“蟹”に憑りつかれ、彼女は周りを突き放した
それが解決し、少し笑顔が見れるようになった
そして・・・その一件を終え、彼女はようやく“戦場ヶ原ひたぎ”
という

一人の少女に、戻れたのだ

その、はずなのだが・・・

「あら、心外ね

これは、阿良々木くんの為なのよ？」

「そう、なのか？」

“ええ”と、彼女は手を止める
そのまま、見つめるのは・・・僕

「私は、大好きな貴方と、同じ大学に行きたい
貴方も、大好きな私と、同じ大学に行きたい
そうでしょう？」

「お、おう・・・それは、まあ」

「なら、今は少し無理をしても勉強しないと。阿良々木くん、本
当にギリギリなんだから
だから、頑張りなさい」

そう言って、彼女は笑った
ああ、前言撤回だ

彼女はやっぱり、可愛い僕の彼女だ

そんな、可愛い彼女にそんなふうに言われて
奮い立たない男がいるだろうか？

いや、“否”である

なら、僕のやるべきことは、結局変わらないのだろう

「もう少しだけ、頑張るか」

「ふふ・・・その意気よ、阿良々木くん」

シャーペンを装備

僕は再び、目の前の参考書と向かい合う

ふふ・・・残念だったな、参考書

ついさっきまでの僕だったら、お前を前にし猛烈な眠気に倒れそう
になっただろう

しかし、しかしだ

今の僕は、一味違うぞ？

今の僕は可愛い彼女の応援を受けて、勇気百倍・元気百倍だ
ドラクエ9のテンションMaxも、今の僕には勝てないだろう

「いざあ・・・！」

かくして、僕と参考書の熱い戦いは

ここに・・・火蓋を、切ったのである

――――
――――
――――

色々、あった

語るとなると、それはもう上下巻にわかれてしまいうくらいにその続編もまた、上下巻にわかれてしまいうくらいに本当に、色々あった

そんな日々が過ぎ去った後、待っていたのは高校三年生にしたら、まあ当然のイベント

“受験勉強”という、過酷な毎日だった

ある意味、怪異と同じくらい（大袈裟な話じゃなくて、僕からしたら本気でそうだと思うている）に大変な日々そんな毎日が、僕を待っていたのだ

「戦場ヶ原と、同じ大学に行きたい」

と、これが僕の目標

「大丈夫よ、阿良々木くん・・・何年だって、貴方を待ってるから」

と、これがその発言の後の戦場ヶ原の言葉

彼女は、疑うことなく僕の“浪人”を見こして発言していた信用ないな、僕

まあ実際問題、今のままの学力じゃキツイのは当然のことながら僕は、数学以外の教科は全て苦手というダメっぷり

そんな僕を、何とかしようと勉強を教えられているのが戦場ヶ原と、もう一人

“羽川翼”である

「何でもは知らないよ。知ってることだけ」

なんて、口癖を持つ彼女は

優秀にして、完璧

完全にして、最優

そして・・・以前、“猫”に魅入られた過去を持ち

そんでもって、僕の恩人でもある

その2人が、交互に僕に勉強を教えてくれた

その甲斐あってか、僕の成績は以前とは比べ物にならないほどにな
っていた

だが、まだまだ油断はできない

相変わらず、大学はギリギリなのだから

むしろ、僅かに足りていないだろう

そんな僕に、彼女は・・・戦場ヶ原は、志望大学を僕のレベルに合
わせようと考えていたこともあったようだが

それは、僕が断った

彼女には、彼女の行きたい所に行ってほしかったし

何より、好きな人の前では格好つけたくなるものだろう？

そんなわけで僕は、過ぎ去った非日常が懐かしい思い出となってし
まうほどに

死にそうになりながら、毎日参考書と激闘を繰り広げていたのだった
今日も、そんな激動の日々の内の一日

今日の“家庭教師”である戦場ヶ原の家で、2人で黙々と勉学に励
んでいたわけです

「そろそろ、終わりにしましょうか。」

「そう、だな・・・」

そんな時間も、もう終わりを告げるようだ

二人して、同時にシャーペン置き

そして、“ふう”と息を吐き出す

長時間の勉強は、流石の戦場ヶ原さんにも堪えたようだ

「ふう・・・阿良々木くんの足りてない脳みそに勉強を教え込むのが、こんなに大変なんて」

「――僕のせいだった
ていうか、コラ

「ガハラさん、やっぱ戻ってない？ねえ？」

「冗談よ。“馬鹿々木くん”」

「だったら、その悪意のある間違い方を止めてくれ。
僕の名前は、阿良々木だ」

「あら、ごめんなさい。噛んじゃったみたいね」

「違う、わざとだ・・・」

「“言い切った”」

「ほら見る、ワザとだっ！」

しかもそれ、僕の知り合いの“キャラ”をもろにパくってるからな。
いや、戦場ヶ原はあんま知らないのかもしれないけどさ

「そもそも、私が貴方を何て言おうと関係ないわ。
私が貴方を好きだという気持ちに、揺らぎはないのだから」

「うつ・・・」

そう言われると、弱いものがある
というか、相変わらず直球

直球も直球、ど真ん中ストライクだ
よくもまあ、ここまでハッキリとそのような言葉が言えるのかとい
うくらいに

まあ、悪い気はしないのだが
それにしたって、未だにテレはするさ

元々、こういうのに慣れてないってのもあるけど
――僕は、戦場ヶ原のことが好きなのだから

「戦場ヶ原、好きだ」

「あら、そう。でも、私の方が好きよ」

言って、彼女は微笑む

とても、年相応に

それでいて、相変わらず可愛く
彼女は、微笑んだのだ

「好きだよ・・・“ひたぎ”」

「だから、私の方が好きよ・・・“暦くん”」

ああ、本当に

負けず嫌いなところは、相変わらずだけど
けど、まあいいかな

結局のところ

僕があゝの“非日常”の出来事を、全部懐かしく思えるのは
彼女が、いたからなのだろう

“戦場ヶ原ひたぎ”

僕の、彼女

大好きな女の子

そんな彼女の為に、頑張ろうと思うのは
決して、間違いなんかじゃないのだろう

だから・・・うん、頑張ろう

――――

最終的に、何が言いたいのかというと

僕が語るのは、そんな“毎日”について

他愛ない、僕らの日々の物語

“日常”の物語だったり

相変わらず、“非日常”なことに巻き込まれたり

変わったり、変わらなかったり

そんな・・・“今の僕らの物語”

ハッキリ言って、今までの物語からしたら
物足りなく感じるかもしれないけれど

そこは、まあ――“ご愛嬌”

当たり前な話だが、やはり毎日が毎日

あんなエキサイティングなはずがなく、静かな日々だってあるわけで
それでも、僕の話に興味があるというのなら

こうして語るのも、吝かではないということだ

話が、長くなってしまったが

それじゃあ、語るとしよう

僕こと、“阿良々木暦”が過ごす、この日々の中
紡がれていった、物語を

題名をつけるなら、やはりコレ

“ 日々物語 ”

さあ・・・新しい物語の、始まり始まり

こよみサンデー 其ノ壹（前書き）

まずは、本当に平和な

極々平凡な、ある日曜日に起こった

聞く人にとっては、退屈な

当事者からしたら、胃が痛くなるような

そんな、物語から

こよみサンデー 其ノ壹

以前にも言ったとおり、僕は現在“受験勉強”という過酷な日々を過ごしている

必死に、頑張つて勉強をしている

愛する彼女と、同じ大学に通う為に

等と言えば、聞こえはいいが

いや、実際問題間違つてはいないのだが

――僕の彼女・・・“戦場ヶ原ひたぎ”は、つい最近“ツンデレ”を卒業した

そして、見事にデレた

それはもう、もの凄い勢いで

いや、もう“ドロ”って勢いかもしれない

わかりづらい、というか何だか響きが物騒かもしれないけど

ともかく、以前から可愛かった彼女が、さらに可愛くなったのは言うまでもないだろう

――そんな彼女だ

もしかしたら

いや、もしかしなくても

僕が浪人なんてことになったら、本気で一緒に浪人しかねない

それだけは、何としても避けなければならぬ

そんなわけで、今日も今日とて、僕は必死に勉学へと励むのだったが、しかしだ

「流石に、少しは気分転換もしないとな」

と、まあそういうわけだ

今日は日曜日

本当なら朝から戦場ヶ原との勉強会の予定だったのだが、彼女の都合が突然悪くなったとかで

結局、夕方からとなったのだ

それまでは、自主的に勉強しようとして頑張っていたのだが

流石に、朝っぱら、ずっと机に向き合えるかと言えば――“否”
はつきり言って無理だ

それに、根を詰め過ぎるのもよくないし

いや、まだ詰めてすらいらないが

それでも、だ

折角の良い天気、しかも日曜の朝

部屋に籠りっぱなしなのは、いかなものかと・・・と、思った次第なのだ

――閑話休題

そんなこんなで僕は、いつものパーカーに着替えると
財布と携帯を持って、外に出たのだった

「ぶつちやけ、朝からガハラさんの顔が見れなくて・・・テンション、上がらないんだよね」

・・・はい、ぶつちやけちゃいました
そうです

朝から会えると思ってた、愛しのガハラさんに会えないからってテンション下がりまくりです

こんな状態で勉強とか、マジ無理つす
てなわけで、外に飛び出したわけですよ

これは、そんな日曜日の物語

こよみサンデー 其ノ壹

――――

「ん」

と、背を伸ばし、僕は歩いていく

日曜の朝っぱら、静かな街中を

コースは、いつもと変わらない

僕愛用の、散歩コースだ

見上げると改めて思うが、やはり今日は良い天気だ

うん、外に出てよかったな

「・・・と、あれは？」

ふと、そんな僕の視界の先

“ぴよこん”と、揺れる見覚えのあるツインテールが見えた

その背中には、もはやトレードマークとなっている大きな大きなリ
ュックサックが背負われていた

そんな少女、見覚えのある少女のことを
僕は――よく知っている

「八九寺……」

“八九寺真宵”

蝸牛となった、小さな少女

帰るべき場所に帰れない、一人の“少女の霊”

ともあれ、それすらも、もはや過去のお話

しつこいようだが、遙か昔の物語

それらを今この場で語るのは、もう何度も言っただが無粋なことだ

それに、今の彼女は違うのだ

以前は例えるなら、一種の“地縛霊”

今は――二階級特進し、“浮幽霊”らしい（どちらも、本人の言葉だ）

とにかく、今の彼女は以前とは違う

人を迷わすこともなく、自分が家を探し彷徨うこともなく

ただ日がな一日、街を歩き回る可愛い小学生の“幽霊”だ

さて、話が長くなってしまったが

目の前には、その件の少女――八九寺真宵

彼女は先ほどから何やらキョロキョロと辺りを窺っているが、未だに僕のことには気づいていないようだった

さて、こんな状況の中

この語りを聞く皆は、当然のことながら、僕が周りの目など一切気にせず、彼女に向って走っていくと

さらには、彼女を後ろから抱き締め、色んなところを触ったりと

それはもう、犯罪ギリギリなスキップをとるとでも
そう思ったことだろう
唯一つ・・・唯一つ、言わせてほしい

――馬鹿にするな、と

ハッキリ言う

僕はもう、受験を控えた善良な一受験生なのだ
今は一時間でも、一分でも、一秒でさえ、勉強へと回さなければな
らないほどに忙しいのだ
ましてや、だ

今はそんなとても貴重な・・・それこそ、ウルトラマンが戦闘の為
に使う貴重な三分間のような時間を
こうして、気分転換として、息抜きとして、次なるステップへと進
む為の準備時間として

大事に、大事に使っているのだ
そんな貴重な時間を、小学生相手に使えるかどうかなんて
そんなこと、考えるまでもないだろう？

確かに――確かに、だ

昔の僕だったなら、彼女を見つけるなり、全力をもって駆け寄った
ことだろう

だけど、だけどさ・・・それは、昔の僕の話
まだまだ青かった、若かった、色々と未熟だった頃の僕の話だ
けど、今は違う

今の僕は、進むべき目標も見据え、共に寄り添うべく彼女もいて
あの頃に比べると、全てにおいて大人になったといえよう
故に、八九寺

本当に、本当に申し訳ないことだが
僕は、君に構っている時間はないんだよ

「さて、行くか」

言葉を一つ吐き出し、僕は歩き出す
向うのは・・・“八九寺真宵がいる方向”

――うん、まあね

そんなことを思っていた反面、僕はこうも思うわけですよ
目の前に、ツインテールの小学生がいる
その光景を前にし、僕は思ったわけですよ

“本当にそれでいいのか？”と

いやいやいや、正直な話

あの、八九寺だよ？

目下、浮幽霊として街を歩き回っている為に、本当にたまにしか会えないあの八九寺が

今、僕の目の前にいるんだよ？

なのに僕は、それをスルーするのか？

ハッキリ言う

スッパリ言う

もう、断言しよう

――無理である

「そっか、うん。無理なら、仕方ないよな、うん」

ああ、そうだ

本当に残念ながら

本当に遺憾ながら

この身が、この心が、彼女とのスキンシップを求めてやまないのならば

最早、僕からは何も言うことはないさ

唯々、その想いに、従うことしかできないのさ

「てなわけで……」

前置きが、長くなってしまったが

結局僕がやることなんて、唯一つ……

「はっちくじーーーー！！会いたかったぞ、コノヤローーーー！！！」

「キヤアアアアアアア！！！？？」

――と、勢いよく

やっぱり、全速力で駆け寄って

案の定、というかいつも通り……彼女を思い切り、抱きしめることなのだろう

「久しぶりだなー！元気だったか！？」

「キヤ——！キヤ——！？」

「それじゃ、いつも通り触らせる！揉ませる——！」

「キャ————！！！！？？」

言いながら、暴れる八九寺など知るものかと

僕は、彼女の胸を豪快に揉んでみせた

うん、うん・・・うん

相変わらず、素敵な触り心地・・・

「ガウッ！！」

「いってええええええええ!!?!?!?!」

いてえええええ！！？

噛んだ、噛んできおった

僕の左手を、それはもう野犬の如く

恐ろしい勢いで、なんの躊躇いもなく

八九寺は、
嚙んできやがったのだ

僕は慌てて左手を彼女から離すと、彼女の体を開放する

「ガウ！！ガウ！」

八九寺は、野生に戻っていた

目が、目が恐いですよ八九寺さん

「どう、どう。落ち着け、八九寺！」

僕だ、阿良々木だ、君の味方だ！」

「ガウ、ガウ……」

「ほら、覚えてるだろ？」

君の大好きな、とっても素敵なお兄さん、阿良々木暦だ」

「ガウ・・・あ、あれ？」

誰かと思えば、“小此木さん”じゃないですか」

「僕をそんな“雛見沢”という村の中、暗躍する作業着を着たオジサンと一緒にするな

僕の名前は“阿良々木”だ」

「失礼、噛みました」

「違う、わざとだ・・・」

「かみまみた」

「ワザとじゃない!？」

「かみマミツた」

「マミさー！ーん！！って、ネタが限定されすぎてる!!!!!!」

“まど マギ”とか、知ってる人しか知らないよ

しかも、よりもよってマミさんかよ
ていうか、八九寺知ってんのか

地味に凄いな

「まあ、私は流行に敏感ですからね」

「だったらお前は、流行には乗れてねーよ。まど マギ、もうとくに終わっちゃってるもん」

「ほむうつ!!?」

知らんかったんかい

そして、驚き方すらその流れを貫くんかい

凄いのか、馬鹿なのか、判別がつかんぞ八九寺

「ていうか、久しぶりだな八九寺」

「そうですね、何だか久しぶりな気がします
つい最近は、岩にでも隠れてたんですか？」

「それはない」

受験勉強だ、馬鹿

よほどのことがない限りは、放課後は決まって勉強だしなあんまり、自由な時間とかはなかった気がするし

「ま、こう見えても、僕だって受験生だからな
最近は頑張つて、勉強に励んでたわけですよ」

「ほ、そうだったのですか

“馬鹿々木さん”にしては、本当に頑張ってるみたいですね」

「・・・八九寺、非常に残念なお知らせだが、それはネタ被りというものだ」

「なんですと!?!」

驚いていた

まあ、まさか自分の“キャラ”が使われるとは思っていなかったの
だろう

ドンマイ、八九寺

「むむむ・・・これは、私もさらなるレベルアップを図るほかあり
ませんね」

「ほう、良い心がけだな」

「そしてアニメ版の“偽物語”では、私が主役を・・・！」

「そうはさせんぞ！」

僕の月火ちゃんと火燐ちゃんの見せ場を、八九寺如きに奪わせはせ
ん！！」

「うわ・・・自分の実の妹を“僕の”とか、ドン引きです」

「そこで、一気にクールダウン！？」

あれ！？ちよつと、ここはノツテくれよ！！」

「近づかないください。私、貴方のことが嫌いです」

「戻ってる！！？出会ったところに戻ってるよ！！？」

そんなに、今の僕アウトだった！？」

せ、切な過ぎる！

初対面の時と同じ反応とか、切な過ぎる！！

ていうかメタな発言に、あえてノツテみたのに、このザマですか！？？

「と、まあ冗談はさておき
今日は、どうしたのですか？
勉強に励んでいるとか言っておきながら、こんなところをブラブラ
と」

「気分転換、または息抜きさ
ま、あんま根を詰めるのもよくないし
折角、こんな良い天気なんだ
外の空気だって、吸いたくもなるさ」

「ああ、そうですね
確かに、今日は良いお天気です」

などと、二人で見あげた空は、やっぱり快晴
昨日の天気なんて覚えちゃいないが、“本日もまた、晴天なり”な
んで、言ってみたくなくなるくらい
今日は、本当に良い天気だ

「あ、そうだ“パララぎさん”」

「僕をそんな“頭の中パツパパー”みたいな名前で呼ぶな
僕の名前は、阿良々木だ」

「では、阿良々木さん
折角こうして出会えたのですから、ご一緒にお散歩と洒落込みませ
んか？」

“どうです？”と、八九寺

これは、何て言うか珍しいっていうか

まさか、八九寺のほうからお誘いがあるなんて

嬉しいっていうか、願ったりかなったりっていうか

そもそも、八九寺が言わなければ、恐らく、というか確実に

僕から、その台詞を言っていただろう

何せ、今日は夕方まではフリーなのだから

「そうだな

一緒に、散歩と洒落込んでやるか」

だから、僕は言う

「――無駄に、決め顔で

いつの日か、僕が出会った奴のような言い方をするならば

『――と、決め顔で言ってみた』なんて

そんな、本当に無駄にかっこつけて

僕は、八九寺に笑い掛ける

「なら、お隣失礼しますね」

「ああ、構わないさ」

わざわざ一声かけてから、僕の隣を歩く八九寺

並んでみれば、身長之差は歴然で

比較的・・・というか、個人的にcomplexeな僕の身長よりも
低い八九寺は

やっぱり、年相応な少女に見えた

「それでは、行きましょうか」

「ああ、そうだな」

そして、彼女は笑うのだ

“ニッ”と、その身長と同じく

やっぱり、年相応な笑顔で

彼女は、笑ったのだった

――そんなわけで、始まった八九寺とのお散歩は

この後、僕の想像を遥かに超えて

まあ、胃が痛くなるような、そんなオチが待っていたことなんて

やはり、今の僕は知らなかったのだ

――次回へ続く。

こよみサンデー 其ノ貳（前書き）

其ノ貳、ということだ

この時はまだ、残念ながら、悔しくも

この後に待つ、なんとも胃が痛くなるようなオチが、待っているな
んて

気付けないでいたのだ

こよみサンデー 其ノ貳

“ 散歩 ”

まあ、言葉のとおり

読んで字の如く

たかが、散歩

――されど、“ 散歩 ”

幾ら考えたところで意味なんて、絶対に変わらないし

そもそも、そこまで深読みをするほどの言葉でもないだろう

むしろ、“ 深読みしろ ” という方が無茶な話である

ともあれ、僕が八九寺と一緒に洒落込むことになったこの “ 散歩 ”
だって、それほどの深い意味はなく

気分転換、息抜き、時間つぶし

そんな単純な意味合いであり、そのことは僕たち二人も互いに理解し、了承していたことだ

―― 故に、故にだ

この後に “ あんなどこ ” になるなんて、この時はまだ予想していたはずもなく

また、想像することすら出来なかったのだということを、ここで重々述べておく

言い訳なんかじゃなく

いや、“ 彼女 ” からしたら、それはもう立派な言い訳なのかもしれないが

それでもやはり、僕からの言い分として

ここであらかじめ、言っておこうと思う

恐らく

いや、確実に

それすらも、無駄になるのだろうか

まあ、いい

今はまだ、どれほど僕が必死に訴えようとも

泣きそうになりながら、こうして語り続けたとしても

恐らくは、これっぽっちも、伝わりっこないのだから

何故なら、これを聞く皆はまだ“知らないのだ”

この散歩の先に、“あのようなこと”が待っていることなど
まだ、誰も知らないのだ

――この、僕でさえ

こよみサンデー 其ノ貳

――＋――

さて、前回までのあらすじ

散歩に出た僕が出会ったのは、“浮幽霊”として活動中の“八九寺
真宵”

そんな彼女との、いつも通りのスキンシップ（八九寺曰く、犯罪ス
レスレな）を終えて

その後、まさかの八九寺からのお誘い

曰く、“一緒にお散歩と洒落込みませんか？”とのこと
まあ、僕からしたら“渡りに船”というか
元々方までは時間があつたので、断る理由も特になく
彼女のお誘いにのり、一緒に“お散歩”と洒落込むこととなったのだ
――それが、今から数分前のこと

「ん、やっぱり外に出て正解だったあ」

と、言うと同時に思い切り伸ばした体
小気味よく骨が音をたて、何とも言えない感覚に僕は目を細める
そんな僕の隣で、八九寺はクスリと笑いを零していた

「まあ、私の場合はいつも通りのお散歩なのですけれど
そういえば、こうして阿良々木さんと一緒に歩くのは久しぶりです
よね」

あ、そうかも
ていうか、事実その通りだ
最近の勉強が、忙しかったのもあるし
八九寺と会う時は、学校に行く時とか、あんまり時間がないときは
かりだった気がする

「たまには、こんなのも、その・・・良いですね」

ぐはっ！か、可愛すぎる！！
今日の八九寺は、いったいどうしたんだ！？
やばい、やばい可愛いよ、八九寺可愛いよ、クンカクンカしたいお・

・

「ば、“薔薇羅木さん？”

いったい、どうしたんですか？」

「い、いや・・・気にしないでくれ

なんていうか、その、ちょっと思考回路が暴走しかけてただけだから
というか、八九寺

僕の名前はそんな“ゴロが悪い”うえ、深読みしたら凄まじくガチな
男だと思われるような名前”じゃない
僕の名前は、阿良々木だ」

「失礼、噛みました」

「違う、ワザとだ・・・」

「かみまみた」

「ワザとじゃない!？」

「“ガチでした”!？」

「だから、違うっつつてんだろ!!!!!!」

これ以上、“薔薇”を引つ張るな、頼むから

そんなもん、僕は勿論のこと、読者だって一切望んでねーよ
第一、そんなネタは“アイツ”だけで充分だったの・・・

「はっはっは！」

呼んだかな、阿良々木先輩っ！！」

「呼んでねーよ！」

っていうか、いつからいた！！？」

驚き、僕が振り向いた先

そこには、快活に笑い、ニコニコと笑みを浮かべる少女
たった今、僕が思い浮かべた少女

“アイツ”・・・“神原駿河”が、其処にいたのだ

“神原駿河”

バスケ部の元エースで、学園のスターで

趣味がBL本で、百合で、僕の彼女である戦場ヶ原が大好き（like
ではなく、loveのほうだ）だという、ちよつと・・・いや、
もう凄まじく変わってる奴だ

因みに、僕の一つ下

つまりは、後輩である

戦場ヶ原とは中学からの付き合いで、その頃から彼女のことが好き
だったらしい

さて、そんな彼女もまた、怪異に関わったうちの一人だった

――彼女は願ったのだ

願いを叶えるという、“猿の手”に

もつとも、後にそれは“猿”ではなく、“悪魔”だったのだと

僕はこの人間モドキな身をもって、文字通り“痛感”したのだが

そのことは、もういいだろう

できれば、あまり思い出したくはないし

あれ以来、“雨合羽”がトラウマになってしまったのだから

まあ、察してくれとしか言いようがない

それでも知りたいというのなら、書店にでも行って、僕らの物語が綴られた本でも買って読んでみてくれ

さて、話題が逸れてしまったが

彼女・・・上原駿河の左腕には、未だに包帯が巻かれている

怪異は、未だに彼女の腕に宿っているのだ

だが、それも二十歳までの辛抱らしい

僕と違って、その頃には左腕の怪異も消えてなくなるそうだ

そんな彼女が

神原駿河が、其処にはいたのだ

動きやすそうな、何時か着ていた私服姿で

僕の視界の中、悪戯が成功した時の子供のような、純粋な笑みを浮かべて

確かに、其処に立っていたのだった

「い、何時の間に・・・」

「ふふ、つい今しがただ

ご覧のとおり、今日は天気が良いだろう？

だから、朝から走って汗をかいていたのだが

するとどうだ、遙か前方に、私の尊敬する、いや崇拜する

あの、阿良々木先輩がいるではないか！」

「あ、ああ・・・それで、走って僕のところに来た？」

「うむ

流石は阿良々木先輩だ

私の行動を、そこまで正確に言い当てるとは」

いや、簡単だろ

もう殆ど、自分で言ってたじゃないか

というか、毎回のことだが、あの褒め殺しとでもいうのだろうか？

あれには、未だに慣れないな

正直、勘弁してほしいものだ

「阿良々木先輩は、いつたい何をしていたのだ？」

「散歩だよ、散歩

戦場ヶ原との約束が、急に夕方からになっちゃってさ

そんで時間出来ちゃったから、ちよつと息抜きもかねて散歩してたんだよ

そしたら、偶然八九寺と会ってさ

そのまま一緒に、散歩してたんだ」

と、そこまで言っと思って出す

そいうや、八九寺って浮幽霊だから、見えない人には見えないんだよな

確か以前、神原には見えてなかった気がする
なら、言っても仕方がなかったかな

「あああああああ！！！！

なんだ、この可愛い女の子はあああああああ！！！！

つて、もしや君が噂の八九寺ちゃんかあああああ！！？？」

「た、助けてください阿良々木さあああああん！！！！！」

「・・・あれ？」

おかしいな

僕の、目の錯覚だろうか？

僕の目の前

そこで、八九寺に向って、激しく頬ずりをしている変態かつ、犯罪者な後輩の姿が見えるんだが

無論、その変態とは、神原のことだ

「いや、いやいや・・・いやいやいや、ちょっと待て、神原」

「なんだ、阿良々木先輩」

「なんだって・・・お前、八九寺が見えてるのか？」

「はっはっは、何を言いだすかと思えば阿良々木先輩
そんなの、当たり前じゃないか」

「え、いやお前、当たり前って・・・前に八九寺と一緒にいた時、
見えてなかっただろ？」

と、僕の言葉

それに対し、神原はフウと息を吐き出す
それから、僕を見つめて笑うのだった

「八九寺ちゃんの姿が私に見えていた方が、今後の話が色々書きやすいではないか！」

「メタかつけーーーーー!!!!!!」

いつそ、清々しいくらいに、ハッキリと言ったな神原も、僕も納得しかけてしまったぞ
だけど、頼むから

頼むから、メタ発言だけは自重してくれ

「まあ、いいではないか阿良々木先輩
こっちの方が、八九寺ちゃんも寂しくないであろう？」

「まあ、確かに」

神原の言う通りかもしれない
そう思い、見つめた先
八九寺は、何だか微妙な表情を浮かべていた

「セクハラをしてくる人が、増えただけじゃないですか？」

「はは、ぬかしおるっ（笑）」

おいおい、誤解しないでくれよ

僕のあれは、たんなるコミュニケーションだ
所謂、スキンシップだ

ムツゴロウさんだって、よく言ってるだろ？

“あっはっは、じゃれてるんですねえ”ってさ

それと、なんら変わりのないものじゃないか
それを、セクハラだと？

はあゝ・・・まったく

がっかりだ

がっかりだよ、八九寺真宵

お前が、僕のことをそういう風に思っていたなんて
僕はお前のことを、本当に友達だと思っていたのに

「これが本当に、世間一般的に言うコミュニケーションなのかどう
か・・・羽川さんに聞いてみて、いいでしょうか？」

「勘弁してくださいっ！」「」

土下座した

それはもう、凄い勢いで

神原も一緒になって、土下座をしている
ちくしょう

ここで羽川の名を出すのは、反則だろう

羽川・・・
ハネカワツバサ
“羽川翼”

猫に魅入られた、僕にとって命の恩人である彼女

優秀にして、完璧である彼女のことだ

きっと、この話を聞いたなら、長い長いお説教タイムに突入してしま
うだろう

ああ、簡単に想像できてしまうのが、逆に怖い

「ふふふ・・・阿良々木さんの弱点なんて、お見通しです」

「くっ・・・やるじゃないか、八九寺
ちよつと見ない間に、随分と成長したじゃないか」

「今の私は、ただの八九寺真宵ではありませんよ
成長した、スーパ―八九寺真宵です！」

むかし、戦場ヶ原も似たようなことを言ってたな

戦場ヶ原は、ハイパーまでいったみたいだが

そのうえ、デレも合わせれば、かなりのレベルアップである

まあ、余談も余談

閑話休題も、いいところである

さておき、だ

「神原は、八九寺の姿が見えるんだな？」

「ああ、見えるぞ

よそしくな、八九寺ちゃん」

「はい、よろしく願いますね」

そう言つて、握手する2人

そんな二人の様子を見つめ、僕は思うのだ

まあ、これはこれで、悪くはないよな

八九寺だつて、寂しくなくなるだろうし

やっぱり、話せる奴は、多いにこしたことはないだろうしな

ーーーーと、そうだ

「神原

神原は、この後って暇なのか？」

「今日は、特に予定はないぞ」

「そっか

なら、僕たちと一緒に散歩でもしないか？」

「それは、構わないぞ

むしろ、此方からお願いたいくらいだ
八九寺ちゃんも、構わないか？」

「はい、私も構いませんよ」

「ーと、いうわけでだ

散歩のメンバーが、一人増えたわけなのだが
やることなんて、特には決めていないし
目的地なんて、定めていない

まあ、所詮は、唯の散歩だ

人が増えたところで、やることなんて変わらないし
今言っただけだが、やることなんて決めていない
ただ一人増えた分、少し賑やかになるくらいだろう

「さて、そんなじゃ・・・散歩の続きと、洒落込むか？」

「そうですね」

「うむ、そうしよう」

と、三人で頷き合い、歩き出す
時間は、まだ昼にも満たない
まだまだ、散歩は続きそうだ

なんて・・・そんなことを、思った時だった

「暦、お兄ちゃん？」

「え・・・？」

という、声が聞こえてきたのだ
そして・・・誰に見せるでもなく
僕は、その声の主を見つめ、笑みを浮かべながら
小さく、手を振ったのだった

「よう、 “千石”」

「ああ、やっぱり暦お兄ちゃんだったんだ」

と、声をあげかけよってくる少女
そんな彼女を見つめ、僕は思った
ああ

――今日は、やけに知人に会った日だなあと

――次回へ続く――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1457y/>

化物語～日々物語～

2011年11月20日16時58分発行